

なり、其説皆通せり、

〔東雅鱗介〕水母クラゲ○中 太古の俗、魚をば鰐廣物鰐狹物などいひしと見えたる、又呼てナともヲともいひけり、魚の字讀でナといひ、ヲといふ即是也、イヲとも、ウヲともいふが如きは、イといふは發語之詞也、イ亦通じてウといふは轉語也と、万葉集抄に見えけり、ナといひし事、漢に魚菜などいふもの、如く、魚をも菜をも同じくナといひし、其謂れあるべけれど、今は不詳、ヲといふは、韓地の方音也、今も朝鮮の方音、魚讀でヲといふなり、

〔倭訓栞字前編四〕うを 魚をいふ、浮尾の義なるべし、柳文の注に、楚越之人、數魚以尾不以頭也とみ

〔日本書紀繼體〕七年九月勾大兄皇子○安親聘春日皇女○中口唱曰○歌妃和唱曰○中都奴婆播符以籤例膳伊開能美讌矢駄府紆鳴謨紆陪爾提々那皧矩○下

〔貞丈雜記六飲食〕一女の詞に魚をまなと云、真菜也、なとはさいの事也、庵菜に對して真菜と云也、今も京の詞に、鮓魚をすしなと云、又魚屋をなやと云も、なは魚の事也、魚類のさいを真菜と云、さかなど云は酒菜也、さけの色々取交て煮たるを、合菜と云なり、清少納言枕草紙に、たくみの物くふこそいとあやしけれ略あはせおみなくひつればとあり、あわせおみなは合大御菜也、

〔古事記傳十四〕真魚昨は麻那具比と訓べし、魚を那と云は饌に用る時の名なり、只何となく海岐受佐和佐和邇此五字控依騰而打竹之登遠遠登遠爾以音此七字獻天之真魚昨也、

〔古事記傳十四〕真魚昨は麻那具比と訓べし、魚を那と云は饌に用る時の名なり、只何となく海水此字乎と云て、那とは云す、書紀持統卷に、八釣魚てふ蝦夷の名の訓注に、魚此云讌、万葉五十三に奈都良須、魚釣これら釣魚は饌の料なる故に、那と云り、今世にも、鮓にする魚を須志那と云ひ、魚をひさぐ屋を那夜と云、さて菜も本は同言にて、魚にまれ菜にまれ、飯に副て食物を凡て那と云なり、菜と魚とを別に思ふは